

スヘキ地ヲ管轄スル治安裁判所ノ裁判所書
記ニ囑托シ得ルナリ裁判所編制法第六十
二條參看

第一百五十七條 送達受領人ニ関スルノ條
原被告ニ為ス可キ送達ハ訴訟能力ナキ者ニ付
テハ其法律上代人ニ之ヲ為スモノトス
官廳町村及ヒ公會係ニ訴ヒ又ハ訴ヘラレ得可
キ人民集會ニ付テハ其主長ニ送達スルヲ以テ
足レリトス
法律上代人數名アル時又ハ主長數名アル時ハ
其一人ニ送達スルヲ以テ足レリトス

第一百五十八條 全上

常備陸軍又ハ常備海軍ノ下士又ハ卒ニ為ス可
キ送達ハ其直屬ノ上長司令官歩騎砲ノ小隊長
ニ之ヲ為ス可シ

第一百五十九條 全上

總理代人又ハ高工業ニ因テ起リタル争訟ニ付
テハ其支配人ニ為シタル送達ハ其原被告本人
ニ為シタルト同一ノ効力ヲ有ス

第一解理由ノ説明 本文第一百五十七條乃至
第一百五十九條ニ付キ理由説明ニ述フル所ニ

依レハ此規則ハ即チ從來獨ニ國ニ行ハレタ
ル法制ニ相適合スル所ナリト明言セリ

〔第二解制定ノ沿革〕 北部獨ニ聯邦草案ニ於
テハ本文第百五十九條ノ規則ヲ明示セス〔下

ノ第六解參看〕其他ニ至テハ約ネ各草案共ニ
同一ナリ〔然レ下ノ第五解參看〕而テ國議院委

員會ニ於テ異議ナク採用セラレタリ又本文
第百五十八條ノ「又ハ常備海軍」ト追加シタル

ハ起稿委員ノ議決ニ因ルモノニシテ之ニ付
テハ議事筆記録ニ記載シアラサルナリ

〔第三解訴訟ノ能力アル原告被告〕 本法ニ於テ
ハ敢テ訴訟能力アル原告被告本人ニ送達セザ

ルヘカサラサルノ明文之アラス〔然レモ本法第
百六十二條以下第百六十六條以下ニ於テ自

ラ明瞭スル所ナリ〕トハ虽モ固トヨリ言テ俟
タヌシテ當然ナルト理會ス可キナリ是ニ

由テ本法第五十一條第二項ニ依リ亦孛漏生
内國通法候ニ法朗西民法ニ於テモ丁年ノ家

児及ヒ婦人ニ係ルモノハ其本人ニ送達シテ
而テ其父又ハ配偶夫又ハ親屬ノ後見人ニ為

サス但第百六十六條ニ依リ例外ノ場合ハ固
トヨリ此限ニ在ラサルナリ然レモ是ヲ以テ

此輩本人ニ係リ争訟シタル裁判ノ効カト相
混同視スル勿レ〔本法第五十二條ノ註解參看〕

千八百七十七年三月二十三日ノ帝國高等高等
事裁判院ノ説明ニ從ハハ公然ナル商會ノ呼
出ハ其社負本人ニマテ効力アルモノナリト
云フ然ルニ訴訟能力アル者本人ニ送達ヲ為
サ、ル可ラストスル時ハ右ノ説明ニ反對ス
ルナリ〔本法第五十六條第五十七條ニ對スル
第六解參着〕

〔第四解法律上代人〕 此理義ニ付テハ本法第
五十條第四解及ヒ第五十五條第一解ヲ參着
ス可シ○獨ヒ各邦ニ對シテハ〔本法第五十條
第四解參着〕此理由説明ニ於テ後見セラレ、
者又ハ未丁年ニシテ父タル權力ニ屬スル者
ニ為ス送達ハ後見人又ハ父ニ之ヲ為サ、ル
可ラスト述ヘタル所ハ必要ト云フヘシ乃チ

是レ第五解第二項ニ舉述スル趣義ヲ確カム
ル所ナリ又第百五十七條ニ付キ理由ノ説明
ニ述フル所ニ曰官廳町村公會係ニ概シテ原
被告タル能力アル人民集會〔本法第五十條第
三解參着〕ニ關シテハ即チ其法律上代人ニ為
ス送達ノ法律上効力アリ得ヘキ限り且其代
人ハ代理ヲ為ス本人ノ為メ送達ヲ受領スル
權利及ヒ義務アル限りハ此第一項ノ規則ヲ
適用スヘシ又各場合ニ於テ或ハ特定ノ法律
上又ハ申合規約上彼ノ人民集會ノ代理タル

へキ者概シテ一般ノ訴訟ニ関シ或ハ特定ノ
訴訟ニ関シ或ハ送達ヲ受領スルニ付キ其権
ヲ有スル時モ亦同シ例へハ商會ニ付テハ商
法第百十七條第百四十四條第百六十七條第
百七十二條第百九十六條第百三十五條第
二百四十四條又組合ニ関シテハ千八百六十
八年七月四日頒布ノ組合條例第十七條第二
十四條第二十九條第四十三條第四十九條等
参看然レ氏右ノ者ニ必ス送達ヲ為ス可キ責
アリト為スニ非ラスバイルン國訴訟法第百
九十三條ウニルテムベルグ國全上第百二
十八條字漏生國草案第百四十九條参看及テ
本文第百五十七條第二項ノ自ラ當然ニシテ
且交通ノ利益上ニ定メタル規則ニ従ヒ如何
ナル場合ニ於テモ仮令其首長ハ総理部理ヲ
論セズ法律上ノ代人ナラスモ尚ホ其首長ニ
送達ヲ為セハ即チ足レリト為ス所ナリ北部
獨ニ聯邦草案第百三十六條字漏生國草案
第百四十八條(二)ハノ一フル國草案第百五十
九條同國訴訟法第百二十一條ウニルテムベル
グ國全上第百二十八條バイルン國全上第
百九十三條参看又原被告ニシテ數多ノ同権
利ヲ有スル法律上代人若クハ首長ヲ有スル
場合ニハ其簡便ノ目的ニ因リ其中ノ一人ニ

送達ヲ為セハ即チ足レリトス〔序漏生國裁判
通法第一編第三十四條バイルン國訴訟法第
二百三條ウエレテムベルグ國今上第二百二十
九條參着〕而テ此規則ハ本法第百七十二條第
一項ニ於テ更ニ補充セラレ、所アルナリ之
ニ及レ数多ノ訴訟人ニシテ之ヲ共同ノ原告
又ハ被告共同訴訟人補助參加人〔タラサル場
合ニハ其各人ニ送達セサル可ラス〕〔序漏生裁
判通法第一編第七章第三十一條ウエレテムベ
ルグ國訴訟法第二百二十九條ハノール國
同上第百二十一條オルテムホルグ國今上第
八十七條第二參着〕又共同訴訟人ニ付テハ本
法第五十六條第五十七條ニ對スル第四解ヲ
參着スヘシ

死亡者ノ家宅ニ数多ノ相續人ノ為メ送達ヲ
為レ得ルノ規則〔序漏生國裁判通法第一篇第
七章第三十二條〕ハ本法ニ於テ之ヲ採用セス
何ントナレハ乃チ序漏生國法制ニ於テ既ニ
之ヲ無用ナル法律タルヲ實驗セルヲ以テナ
リ〔序漏生國訴訟法草案會議筆記錄參着〕
又國君及ヒ君族ニ送達ヲ為スニ付テハ訴訟
法實施條例第五條ヲ以テ制定スル所アルナ
リ云々

抑本文第百五十七條第二項ニ於テハ單ニ人

民集會〔本法第十九條第七解參者〕トノ明示
シアリテ本法第十九條ニ於ケル如ク會社云
々ヲ特別ニ列載セサル所ニ依レハ即チ第十
九條ノ「又ハ其他ノ人民集會」ナル語ニ會社等
ヲ包含セシムルノ義ナルヲ知ルヘシ又概シ
テ第十九條ニ特示セル工業社ノ如キモ此人
民集會中ニ含蓄シアルナリ
而テ協會公舎及ヒ積財〔本法第十九條〕ニシテ
公會又ハ官廳ノ資質ヲ有スル時ニ限り本文
五十七條第二項ニ屬ス若シ然ラサレハ則チ
該條第一項及ヒ第三項ニ據ルヘキナリ
本法第五十四條第二項ノ場合ニ於テハ訴訟
能力ナキ無形人ニモ送達ヲ為シ得ルナリ

〔被參預人〕

法朗西民法及ヒ「バデン國法」ニ依

レハ被參預人ハ必ス參預人〔訴訟參預人〕ナリ
シテ訴訟ヲ為シ得サルナリ本法第五十一條
第一項ニ於テハ亦右ノ法制ニ據テ自ラ契約
ヲ為シ之ヲ果行シ得ル者ハ訴訟能力アルモ
ノト定メタリ〔本法第五十條第二解乙項及ヒ
第五十一條第三解參者〕是ニ於テ上ノ第三解
ニ依リ被參預人ニシテ訴訟能力アル以上ハ
又送達ヲ受收セサルヘカラス然レモ訴訟能
力ナキハ本文第百五十七條第一項ニ照リ
其被參預人ニ對スル送達ハ之ヲ參預人ニ為

スヘキナリ而テ其參預人ハ又被參預人ニ拘
ハラス自ラ專断決行スルヲ為シ難キ規則ナ
リ是故ニ法胡西民法ノ如ク此如キ場合ニハ
必ス被參預人ト及ヒ參預人トニ送達ヲ為サ
シムルヲ良シトスヘキナリ

数名ノ訴訟代人ニ付テハ本文第一百五十七條
第一項ヲ適用ス可キナリ〔本法第八十條第三
解參者〕

又此第一百五十七條第三項ノ場合ニ於テハ本
法第一百七十二條第一項ニ照シ交付スヘキ書
類ハ只一通ヲ以テ足レナリ〔本法第一百七十
二條乃至第一百七十五條ニ對スル第三解參者〕

〔第五解軍人〕上ノ第三解及ヒ本法第六百八十
三條第二項其他本法第八十四條及ヒ本法
第八十二條乃至第八十五條ニ對スル第
六解參者 本文第一百五十八條ニ對スル理由

説明ニ曰軍人ニ為ス送達ニ付テハ彼ノ字漏
生國裁判通法附録第五十五條ニ相反シテ下
級ノ軍人ニ関シテノニ特定ノ規則ヲ設ケサ
ルヘカラス乃チ此營ニ直チニ送達スルキハ
之ニ應シ能ハサル場合アリ得ヘキヲ以テナ
リ〔字漏生國草案第四百十八條ヘツセン國草
案第二百二十六條北部獨乙聯邦草案第二百
三十七條參者〕

而テ下士及ヒ卒ニシテ常備服役ノ者ニ為ス
送達ハ之ヲ直屬ノ司令上長官ニ託スル所ハ
即チ字漏生國現行法同國裁判通法附録第五
十四條千八百二十七年三月二十二日頒布ノ
勅宣^ニ保^ニ字漏生國訴訟法草案及ヒ北部獨乙
聯邦草案共ニ呼出ノ送達ト他ノ送達トノ區
別ヲ廢シ上長官ニ送達ヲ為スハ實際ニ適切
ニシテ而カモ総ヘテ下級軍人ニ為ス送達ノ
通則ト為スニ足レリ本法第三百四十三條參
者ト云フノ理由説明ノ趣義ニ適合スルナリ
然リ而テ上長官之ヲ本人ニ違付スヘキ責務
アルト保ニ固トヨリ上長屬僚ノ内部ノ關係
ニ從フモ尚ホ實ニ本然ノ受領人ニ達スルト
否トニ因リ送達ノ効力ニ有無アルト付テ
ハ特ニ明示スルヲ必要トセサルヘキナリ北
部獨乙聯邦草案第二百三十七條ノ規則ハ之
ニ異ナリ
上長官ニ為ス送達ニシテ止ヲ得サル中ハ然
シ本法第百六十五條乃至第百七十一條第三
解參者^ニ其住宅ニ為スハ必竟本法第百六十九
條ニ本ツク所ナリ云々
本文第百五十八條ニ軍人ト明示スルハ何人
ヲ指スノ義ナル乎ニ付テハ本法第十四條及
ト第十五條ニ對スル第三解ヲ着ルヘシ

士官及ヒ士官相當ノ軍吏ニハ直接ニ送達ヲ
為ス然レ本法第百八十四條參看

又此第百五十八條ト本法第三百四十三條ト
ノ關係ニ付キ内閣代理員ハ説明シテ曰

蓋第百五十八條ト第三百四十三條ト其行
文ヲ異ニセルハ自ラ其趣義アルナリ乃チ

第百五十八條ニ於テ上長官ニ送達ヲ為ス
トハ是ヲ以テ送達ノ正式ヲ果シタルモノ

ト為スナリ上長官ハ此場合ニハ送達受取
代人ノ資格ニ於テ之ヲ受領シ職權ヲ以テ

之ヲ本人ニ送付セシム然レモ第三百四十
三條ニ於テハ証人トシテ本人ヲ召喚スル

ニハ軍部官吏ヨリ命セシメサルヘカラヌ乃
チ本人出廷ヲ軍官ニ依頼スルノミニテハ未

タ其証人ニ召喚ノ命ヲ果行セリト云フヘカ
ラサルナリ云々

此第百五十八條ノ規則ヲ下士及ヒ卒ニ對シ
テ更ニ緩和ナラシムヘキ規則ハ即チ本法第

二百十一條第二項ニ在ルナリ

此他送達ヲ煩重ナラシムヘキ規則例ハ聯
隊長ニ託スルカ如キトハ各聯邦法ニ於テ制

定シ得ヘカラサル所ハ茲ニ明言セサル可ラ
サルナリ

第六解總理代人及ヒ支配人 本文第百五十

九條ニ付テ理由説明ニ説テ曰總理代人及ヒ支配人ハ其代理ノ關係ニ於テ原被告ノ法律上代人ニ同キモノトス蓋後見人ハ法律上財産ノ經理權ヲ有スルニ因テ亦訴訟ヲ為スノ權理アルカ如ク又總理代人即チ財産ニ關スル一切ノ經理ヲ本人ヨリ委任セラレアル者及ヒ支配人獨ニ商法第四十二條ハ訴訟ヲ為ス為メ特別ノ委任ヲ受ルヲ要セサルノミナラス其支配人ノ如キハ高工業ニ關スル事件ハ法律上訴訟ヲ為シ得ルノ全權アルナリ必竟總理代人又ハ支配人ハ財産ニ關シ若クハ高工業ニ關シ其本人ノ全權ヲ猶ホ第二ノ條ト云フ如ク代理シ且既ニ總理委任又ハ支配人タル權利ヲ本人ヨリ付與シタル深密ナル信用アル所ニ因レハ仮令重大事件ニ關スルニ受任者ト依託者トノ間既ニ全權ヲ付シアルカ故ニ特更ニ委任ヲ為スノ必要アルヘカラヌ從テ送達又訴訟ヲ受領シ得ルノ權利及ヒ義務アルト本人ニ異ナル所ナキモノト視認セサルヘカラス是ニ於テ乎即チ本法ハ北部獨ニ聯邦草案ニ異ナルモ「ハノール」國訴訟法第百六十條ヘツセン國全草案第百二十七條ニ倣フテ此如キ代人ヲ為ス送達ハ本人ニ為スト同一ノ効力アラシメタルナリ而テ

仮令此等代人アルモ本人ニ送達スルハ固
トヨリ妨ケサルノ趣義ナルハ論ヲ俟タス然
リト虽氏遠境ニ住スル人適内國ニ所有スル
財産又ハ商業ノ為メ総理代人又ハ支配人ヲ
指定レ置ク場合ニ於テ其代理者アルニモ拘
ハラス遠隔スル本人ニ送達ヲ為スモノトセ
ハ繁多ナル交通上ノ需急ニ適應スル所蓋僅
サナルヘカラシ

抑商法第四十二條第四十三條ニ制定シアル
此支配人タル者ノ一種ノ位置ハ反テ單純ノ
商事代理者ニハ與ヘサルナリ（バイレン國許
訟法第百九十三條第二項參者）蓋此代理者ハ

委任狀中ニ特示シアラサレハ訴訟ヲ代理ス
ルノ權ナキナリ（商法第四十七條參者）六々
理由説明ニ總理委任ト記スモノハ又全部委
任トモ稱ス（法朗西民法第千九百八十七條サツ
クセン國民法第千二百九十六條）而テ法朗西
民法第千九百八十八條ニ依リ單ニ經濟上ノ
委任ヲ為ス普通ノ用語ノ趣義ト誤解スヘカ
ラス然レ總理委任ト云ヘハ理由説明ニ解ク
趣義ナリト一般ニ理會スルナラン

本文第百五十九條ニ関シテ又本法第三十條
第五解ヲ參者ス可シ

第七解本文第百五十七條乃至第百五十九條

、缺欠

此第五百五十七條乃至第五百五十九條

＝因テ生スル缺點アリ乃チ茲ニ明示セサル

者＝為ス送達ハ適法ノモノト云ハ難キナリ

故ニ例ハ本法第三百條(三)ニ准據シ缺席裁

判ノ送達ノ如キ之ヲ為シ得サルヘシ又例ハ

ハ幼年者其後見人ト同居シアラサル時〔本法

第百六十六條〕其幼年者ニ為シタル送達ハ仮

令幼年者ヨリ之ヲ後見人ニ取次キテ送達ス

ルニ尚ホ送達ノ効アルヘカラサルナリ

鉄道官吏及ヒ檻囚ニ為ス送達ニ付キ或ル聯

邦ニ於テハ其管轄ノ官司ニ為スノ規則ヲ設

ル所アリシモ本文第五百五十七條乃至第五百五

十九條ヲ定メタルニ因リ本法實施條例第十

四條ニ照シ今ハ無効ノ法律ナルナリ然リ而

テ懲治場及ヒ養育院ニ付テハ特更ニ裁判所

執行吏及ヒ郵便配達夫〔本法第百七十八條〕ヲ

其監視人中ニ兼ホシメアリテ自ラ補助ノ方

法ヲ立テタリ又職務章程中ニ裁判所執行吏

ハ鉄道官吏呼出ノ送達ハ之ヲ其上長官ニ通

報ス可シト追加スルモ敢テ法律ニ抵觸スヘ

カラス

然レモ其本人ニ為サスレテ上官ニ為シタル

送達ハ法律上其効力アラサルヘケン

第一百六十條

〔送達受取人ニ関スルノ條〕

原被告受訴裁判所々在地又ハ受訴裁判所々在地内ノ治安裁判所管轄区内ニ住居セス且右所在地又ハ管轄区内ニ住居スル者ヲ訴訟代人ニ委任シアラサル時ハ裁判所ハ原被告ノ申立ニ因リ原被告ニ為スヘキ送達ノ受取人ヲ同所ニ住居スルニ委任ス可キヲ命令シ得此命令ハ豫メ口頭對審ヲ要セスレテ之ヲ為スヲ得此命令ニ對シテハ上訴ヲ為スヲ許サス
原被告獨乙國內ニ住居セス且第一項ニ記載スル地又ハ管轄区内ニ住居スル訴訟代人ヲ指定セサル時ハ裁判所ノ命令ナシト虽モ送達受取人ヲ指名スルノ義務アルモノトス

第一百六十一條

〔全上〕

送達受取人ハ初回ノ對審ニ於テ之ヲ指名シ又ハ原被告其以前對手人ニ書類ノ送達ヲ為シメタル時ハ其中ニ之ヲ指名ス可シ送達受取人ヲ指名セサル場合ニハ後日之ヲ指名スルマテ裁判所執行吏ハ其送付スヘキ書類ヲ原被告ニ宛テ郵便ニ託スヲ得之ヲ郵便ニ托スレハ届達セスレテ送還スルモ尚ホ送達ヲ為シタルモノト者做ス
原被告請求シ且郵便ノ増費ヲ支弁スルヲ承

諾スル時ハ書留郵便ヲ以テ送達ス可シ

第一解第百六十條ニ對スル理由ノ説明

蓋

訴訟送達受取人ノ法制タルヤ既ニ獨ニ普通

法及ヒ旧序漏生訴訟法制ニ採用セル所ナレ

ニ其實用セラルル、區域ニ至テハ法朗西法制

場所ニ關スル管轄ニ於テル如ク未タ發達ヲ

為シアラサリシ然ルニ口頭對審制ノ大ニ行

ハル、以來獨ニ國新定ノ各訴訟法及ヒ同草

案ノ多數ハ皆之ヲ採用シタリハノ一フル國

訴訟法第六十二條第百二十三條同國草案第

百五十七條第百五十八條序漏生國草案第百

四十八條第百五十二條乃至第百五十四條ハ

ツヤシ國草案第百二十四條第百二十五

條澳私太利國草案第百六十二條乃至第百六

十五條バイルン國訴訟法第百九十二條第

百五十一條第百二十五條第百九十八條第

百九十九條第百五十條(六)第百五十一條(五)

第百五十五條第百六十條(五)第百七十

二條第百八十五條バイルン國訴訟法實

施條例第六十四條第六十五條バデン國第

二百三十九條第百四十二條ウエルトムベルグ

國第百二十七條以下第百三十三條北部

獨ニ聯邦草案第百三十八條第百四十條

參看而テ本條ニ於テ之ヲ此如キ範圍ニ於テ

採用セルハ実ハ必要トスルニ因レルナリ
又理由説明ニ於テ何故ニ旧草案〔下ノ第二解
参看〕ニ相反シテ本條ニ於テ内國ニ住スル送
達受取人ト外國ニ住スルモノトノ區別ヲ為
ス乎ニ付テ説明シ且郵便送達ニ関シ獨ニ帝
國ニ住スル者ニ向テハ送達受取人ヲ指定ス
ルノ義務ナシト云フノ説ハ採用スヘカラス
ト述ヘアルナリ

又例外ノ場合ヲ述テ曰例ヘハ郵便ヲ以テ送
達シ能ハサル時又ハ之カ為メ徒ニ時日ヲ費
スヘキ時ノ如キハ例外ノ場合アリ然レモ為
メニ特別ヲ設クルハ宜シカラス必ス其事實
上送達受取人ヲ指名セシムルノ要用ナルト
否トヲ定ムルハ之ヲ裁判所ノ斟酌ニ委ネサ
ルヘカラス又北部獨ニ聯邦草案第二百四十
條ニ於テハ更ニ之ヲ擴張セシメ裁判所ノ職
權ヲ以テ受取人ヲ命スルノ規則ヲ設ケタリ
然レモ何故ニ然ラサルヘカラス乎ニ付テ
ハ更ニ其理由ヲ確知セシメ得サルナリ是ニ
於テ本條第一項ニ於テハ必ス對手人ノ申立
ニ因ルモノト定メタリ獨リ本條ニ於テ送達
受取人指名ノ命令ニ對シ上訴スルヲ許サ、
ル所ハ北部獨ニ聯邦草案ニ同シ

〔第二解制定ノ沿革〕 北部獨ニ聯邦草案第二

同法省

百四十條 = 関シテハ上ノ第一解ヲ参着スヘ
シ該條 = 於テハ本條第二項ノ場合ト虽モ尚
ホ對手人ノ申立 = 因ルト = 定メアリ又字漏
生國草案第百五十二條係 = 本法第一回草案
第百五十四條 = 依レハ該受訴裁判所管轄區
内 = 居住セサル原告ハ各場合 = 於テ送達
受取人ヲ指名スルノ義務アルト = 定メアル
ナリ此規則ノ宸モ完備セル彼ノ千八百六十
九年六月十二日制定ノ帝國高等商事裁判院
設置 = 関スル法律第十條第二項モ亦同シ且
北部獨乙聯邦草案第百三十八條第二項及
モ字漏生國草案第百五十四條 = ハ「或人寓居
スル者」下ノ第三解参着又ハ未タ拘束スル
至ラサル訴訟ノ代理委任ヲ有スル者モ亦送
達受取人タルトヲ得トノ規則アリ本法第百
六十二條及モ第百六十二條乃至第百六十四
條 = 對スル第三解参着
國議院委員ノ議會 = 於テ旧案ノ第百五十二
條又ハ第百五十四條ノ法制 = 回復セントノ
動議アリシモ採用セラレヌ之 = 及シ本文第
百六十一條ノ第二項ハ採用セラレ且其第一
項 = 「送達スヘキ書類」ヲ改テ「送付ス可キ書類
= 修正セラレタリ」本法第百五十三條乃至第
百五十六條 = 對スル第五解参着

同
法
省

第三解送達受取人ヲ指名スヘキ義務ノ因由

蓋送達受取人ヲ指名セサルヘカラスル義

務ノ主因ハ單ニ本文第六十條ノ精神ニ於

ケル住所ノ遠隔ニ在テ而テ共同訴訟人ノ類

ニ在ラサルナリ本法第五十六條第五十七條

ニ對スル第四解參者然レモ該條ノ場合ニ於

テ原被告自ラ任意ニ送達受取人ヲ定メ得ル

ハ固トヨリ言テ俟タヌ又本法實施條例第十

五條(五)ニ於テハ送達ニ關シ法朗西國及ヒバ

デレ國ノ選定ノ住所ニ關スル更ニ擴張スル

法制ヲ保持セシメアルナリ法朗西民法第百

十一條參者上來ノ場合ニ非ラズシテ任意ニ

送達受取人ヲ指定スルヲ許スト否ニ付テハ

本法第六十二條乃至第六十四條ニ對ス

ル第七解ヲ參者ス可シ

受訴裁判所ニ關シテハ本法第九條第一解

第三解ヲ參者スヘシ

第四解送達受取人ニ送達受取人ノ性質及ヒ

能力ニ付キ理由説明ニ解釋シテ曰原被告ハ

選定シタル送達受取人ノ氏名ヲ初回ノ對審

又ハ對手人ニ初回ノ書類送達ノ時該裁判所

ニ届置カサルヘカラス之ヲ届ルニ訴訟人ノ

証明ヲ要セス且特別委任ノ証明ヲ要ムヘカ

ラス况ヤ原被告本人ニ宛テタル送達ニ干預

セサルニ於テオヤ而テ一回指定シタル送達
受取人ハ各級ノ裁判所係ニ強迫執行ニマテ
其効力ヲ有レ恰モ本法第八十二條第八十三
條ハ爰ニ適用シ得ヘキナリ
法第九十二條參看
原告本人ニ送達ヲ為ス權利ハ選定ノ住所
ニ向テモ及ホスヘシ
五十六條參看

蓋之ヲ指定スル以上ハ各級ノ裁判所ニ効力
ヲ有スルノ趣義ハ寧ロ「バデン國訴訟法第二
百四十一條ニ倣ヒ之ヲ明文ニ示スヲ可トセ
ル乎然レモ本法第七十七條第七十八條ニ倣
ハシムル理由説明ノ解説ヲ良トスヘシ且本
法第八十二條第八十三條ニ倣ハシムルモ大
ニ良レ之ニ付テハ本條ハ受任者ニ関シ法朗
西民法第二十三條ニ據レル所アリ

第五解指名ヲ為サス
本文第六十一條上
ノ第二解參看ニ對シ理由説明ニ説述シテ曰
本條ハ送達受取人ノ指名ヲ為サ、ル場合ノ
又更ニ指名セシテ從來ノ受取人ヲ廢シ又
ハ其指名シタル受取人ニ實際送達ヲ果行シ
能ハサル場合モ之ヲ指名セサル時ト同一ニ
看做スヘシ
（ウエルトムベルグ國訴訟法第二百
三十條）結果トシテ郵便ヲ以テ怠慢ナル原被

告ノ法律上ノ送達受取人ト定テ而テ裁判所
執行吏ヨリ書類ヲ郵便ニ託スレハ即チ本人
= 正當 = 送達シタルモノト看做シ反令其郵
便ノ配達レ難クシテ返却セラルモ尚ホ然リ
ト為ス又本法第六百八十三條第二項參看而
テ此主因ハ即チ其届出アル名宛ニ宛テラレ
テ發送セラル、ニ在ルナリ例ハ或ル原被
告訴訟中轉居シ新住居ヲ對手人又ハ裁判所
= 通報セサル時ハ仍ホ原宛名ヲ以テ送達セ
ラル、モ之ニ服セサル可ラス之ニ及シ對手
人及ヒ裁判所ハ轉居ノ通報ヲ得レハ則チ正
當ノ送達ヲ為ス為メ其宛名ヲ示サ、ルハカ
ラヌ又原被告訴訟代人ヲ指定シアルモ其代
人本文第六十條ニ明示スル地ノ區域外ニ
住スル時送付ヲ為スニハ仍ホ訴訟代人ノ宛
名ヲ以テ為スナリ本法第六十二條參看
今ヤ此如キ由縁ニ本ケル結果ト定メタル所
ハ固トヨリ當然ノモノニシテ而カモ「ウエルテ
ムベルグ國訴訟法」第二百二十七條第二百三
十三條「バヂン國今上」第二百四十二條「ハノ
フル國今上」第二百二十八條「ヘツセン國草案」第二
百二十五條「北部獨乙聯邦草案」第二百四十一
條「孝漏國草案」第二百五十一條及ヒ本條第一解
ニ引援セル帝國法律第十條ニ相適合スル所

司
法
省

トス必竟受訴裁判所ノ裁判長カ原被告カ或
ハ好マサレ殊ニ熱望セサル送達受取人ヲ職
権ヲ以テ任命スルヨリハ却テ此法律ニ依レ
ハ送達ヲ確實ナラシメ得ヘキナリハノ一
ル國草案第百五十八條澳私太利國草案第百
六十四條バデン國訴訟法第二百四十條參者
六々

本文第百六十一條即チ郵便ニ託シテ送達ス
ル所ト本法第百七十六條以下即チ郵便ヲ以
テ送達スル所トノ差異ニ付テハ本法第百五
十二條第一解ヲ參者スヘシ又送達ノ時日ニ
關シテハ本法第百九十四條第四解ヲ參者スヘ
シ

〔第六解書留〕 是レ郵便局ヨリ受取ヲ出シテ

信書ノ送配ヲ為スルニ付テハ術語ナリ此手
續ヲ為スニハ一封ノ信書ニ付テ僅ニ二十ニ
シニヒレノミ然ルニ本條第二項ニ於テ特更ニ
尚ホ原被告ノ申立ヲ俟ツヘシト定ムルノ趣
義ヲ解シ難キナリ元來此項ノ動議ノ時ハ「外
國ノ原被告」トアリタルヲ起稿委員ニ於テ現
今ノ行文ニ修正シタルナリ其趣義ニ於テハ
原案ニ差異スル所アラズ

第百六十二條 〔訴訟代人ニ送達ヲ為スル條

司
法
省

拘束セル訴訟ニ於テ為ス可キ送達ハ其裁判所
ニ指定シアルレ訴訟代人ニ之ヲ為スヲ要ス

第一百六十三條

〔今上〕

受訴裁判所ノ為ス審理事件ハ故障、其裁判所ノ
裁判取消、再審、強迫執行ニ係ル新夕ナル審理ニ
因レモノナル時ハ前條ノ趣義ニ從ヒ其裁判所
ニ屬スルモノト者做ス可シ但強迫執行裁判所
ニ於テ為ス審理ハ初審ニ屬スルモノト者做ス
可シ

第一百六十四條

〔今上〕

上訴ヲ為スニ付テノ書面ハ之ヲ對手人ヨリ上
級裁判所ニ指定シタル訴訟代人ニ送達ス未夕
之ヲ定メサル時ハ前裁判所ニ於ケル訴訟代人
ニ若シ之アラサル時ハ初審裁判所ニ於ケル訴
訟代人ニ送達ヲ為ス
又初審裁判所ニ於ケル訴訟代人モ之ナキ時ハ
對手人ヨリ仮令初審裁判所ニ於テノニ選定シ
タル者ナリ凡指名セル送達受取人ニ若シ之ナ
キ時ハ對手本人ニ送達ヲ為ス可シ但本人ニ送
達スル場合ニハ其送達受取人ヲ指名ス可クシ
テ未夕之ヲ為サ、ル時郵便ニ託シテ送達ヲ為
ス可シ

同
法
第
百
六
十
三
條

第一解第一百六十二條ニ對スル理由ノ説明
將ニ訴訟ノ拘束ノ効ヲ生セントスルノ送達
〔起訴狀裁判所執行吏ヨリノ呼出狀ノ送達〕ハ
本人又ハ本人ニ齊シキ者〔本法第一百五十七條
乃至第一百五十九條參看〕ニ送達スルノ外手續
之アラスト虽モ已ニ拘束ノカヲ生シタル以
上ハ總ヘテノ送達ハ原告ノ訴訟代人ヲ定
メアル時之ニ為スヘキナリ而テ本文ノ規則
ニシテ訴訟代人ニ送達ス可シト命令スル所
ハ蓋當然ノ理由アリ乃チ原告ハ訴訟ニ付
テノ委任ヲ為シテ以テ自ラ訴訟ヲ為サ、ル
ニ至リタレハナリ若シ之ニ反シ訴訟代人
為スヘキ送達ヲ本人ニ為シタル時ハ送達ニ
由テ生スル効力〔猶豫期限ノ起算ノ類〕ヲ生セ
サルヲアルヘシ云々
次テ他ノ新定訴訟法制ニ於テ採用スル裁判
言渡、開席ニ於テスル命令、宣誓ノ為メ本人召
出ノ送達ハ之ヲ直接ニ原告本人ニ為ス例
外ノ制ヲ舉論シ
之ヲ要スルニ訴訟代人殊ニ代言人ノ信用ア
ル地位及ヒ責任トヲ茲ニ喚起シテ渾ヘテ右
ノ例外制ヲ斥ケ且説述シテ曰本法草案ハ此
如キ例外ノ法制ハ一モ採用セズシテ而カモ
此第一百六十二條ノ規則ハ一切ノ送達ニ對シ

〔各種各事件各裁判所ノ送達ナリトモ〕有効ノモノトス且又本法第二百十七條及ヒ第二百二十三條ノ場合ヲ除クノ他ニハ決シテ重複ノ送達ヲ為サシメサルナリ云々

即チ本法ハ為メニ獨ニ普通法候ニ「サクセン國訴訟法ノ古ニ復帰シ訴訟代人タル者ハ純然ナル訴訟人ナリト云フヘシ〔本書凡例參看〕蓋此規則ヲ是如クニ單純ナラシメテ手續ヲ簡略ナラシムルノ目的ハ達シ得ヘシト虽此

然カモ原被告本人ニシテ更ニ訴訟代人ヲ監督セシメサルハ反テ放縱ニ失セサルヤ否ハ暫ク實驗シテ開悟スルノ日ヲ俟ツヘキ而已

〔第二解〕第六十二條乃至第六十四條ニ對スル制定ノ沿革 北部獨ニ聯邦草案第二百

三十九條ハ其主義トスル所本法ニ同シトハ虽モ其第七百七十八條及ヒ第八百四十二條ニ於ケル上級ノ裁判所ニ關シテハ本法ニ異ナリテ此第六十三條ニ類似セル規則ハ更ニ之ヲ採ラサルナリ他ノ各草案ハ其大要ハ皆相齊シ

國議院委員會ニ於テ特リ第六十四條ノ第二項ニ付キ兩回勳議ヲ提出シ原被告本人若クハ其送達受取人ニ送達シ得ルトニ修正セシト主張セルト虽モ遂ニ採用セラサリキ蓋

此動議案。依レハ弊ヲ生シ易カルヘシトノ
嫌アルヲ懼レタルナリ

〔第三解拘束〕本文第百六十二條 拘束ハ起訴

ニ因テ初テ生スルモノナリ〔本法第二百三十

條第二百三十五條參看〕是故ニ最初ノ送達ハ

仮令對手人ニ於テ出訴セラル、ヲ知テ訴訟

代人ヲ選定シアル氏必ス本人ニ為サ、ルヘ

カラス〔本法第百六十條及ヒ第百六十一條ニ

對スル第二解ニ舉述スル如ク字漏生國及ヒ

北郡獨ニ聯邦ノ草案ニ於テハ之ニ異ナリ〕

争訟ニ非ラサル手續例ハハ証據ノ確定ニ関

スル如キ訴訟代人ヲシテ其請願書ヲ提出セ

シ、且對手人ヲシテ之ニ署名セシムル場合

ニ付テハ本文第百六十二條ノ効力ヲ有スル

ヲ要スヘキナリ

又第百六十二條ノ主義ニ依レハ〔上ノ第一解

參看〕本法第百三十二條ノ場合ニ於テモ亦尚

ホ例外ヲ允サ、ルナリ

又本法第七十九條ニ依リ訴訟代人ノ受領權

ノ制限モ之ヲ為シ得サルヘシ

訴訟代人ノ後任者モ亦同一ノ權ヲ有ス〔本法

第七十七條第七十八條ニ對スル第四解參看〕

本法第八十二條ニ依テ授任者ノ更送ハ敢テ

影響スル所ナク且委任解除ノ告知ハ僅ニ本

司法省

法第八十三條ニ依リ影響ヲ生スルノ^レ本法
第八十二條及ヒ第八十三條ニ對スル第五解
第一項參者

一名ノ訴訟代人数名ノ原被告ヲ代理スル時
ハ其送付セラルヘキ書類ハ單ニ一通ヲ受領
スル^レニ本法第七十二條乃至第七十五
條ノ第三解參者又一ノ訴訟人数名ノ訴訟代
人ヲ委任シアル時其中ノ一人ニ送達ヲ為セ
ハ即チ足レルナリ^レ本法第八十條第三解參者
而テ復テ其一通ヲ受收ス^レ本法第七十二條
乃至第七十五條ノ第三解參者

第四解第六十三條第六十四條ニ對スル
理由ノ説明 抑送達ハ如何ナル場合ニ於ケ
ルモ其方ニ送達スルヲ要トスル裁判所ニ向
テ代理委任ヲ有スル訴訟代人ニ為ス可キナ
リ而テ此第六十四條ノ趣義モ亦然ル所ト
ス^レオランダンボウルグ國訴訟法第八十八條北部
獨ニ聯邦草案第七百七十八條第八百四十二
條參者^レ必竟或ル送達ニシテ何レノ裁判所ニ
屬スヘキハ當然ナル乎ノ疑惑ヲ生シ易キモ
ノ往々之アリ是故ニ此第六十三條ニ於テ
一々其場合ヲ列載明示シテ之ヲ了解セシメ
乃チ故障^レ本法第三百三條以下^レ上級ノ裁判所
ニ依テ受訴裁判所ノ裁判ノ取消^レ本法第五百

條第五百二十七條第五百二十八條再審〔本法
第五百四十一條以下〕及ヒ本法ニ於テ強迫執
行裁判所ニ付テ定メタル原則ニ基ツク場合
等ノ各項目ナルトテ歴然ナラシメタリ而テ
強迫執行ニ関シ新シク受訴裁判所ニ提出シ
タルニ因リ為ス審理ニ付テハ本法第六百八十六
條第六百八十七條ニ從フヘキナリ然リ而テ強迫
執行ニ付テハ之ヲ管轄スル裁判所ノ數多ナルニ因
リ實ニ必シモ受訴裁判所ニテ之ヲ管轄セサ
ル場合之アルヘシ果テ然ラハ或ハ遠隔セル
訴訟代人ニ尚ホ送達ヲ為サ、ルヘカラサル
モノトセハ甚タ妥當ナラサルモノ、如シ然
リト虽モ本法ニ依テ能ク執行請願人ノ位地
如何ヲ觀察セシムル所ヲ以テ其妥當ヲ得ヘ
キナリ若シ請願人ノ訴訟代人ハ本人ノ為メ
強迫執行ノ代理ヲ為シアルニ及テ其送達ハ
之ヲ本人ニ為スヘキモノトセハ實ニ請願本
人ニ對シ不便利ノ規定ト云フヘカラシ
〔第五解其裁判所ニ屬ス〕此第六十三條ニ
列載明示セル項目中ニハ本法第七十七條第
七十八條ニ列載スル項目即チ反訴、主參加、差
押及ヒ假差押ヲ舉スレテ而テ反テ新ニ故障
ノ一目ヲ掲テアルナリ必竟此行文ハ善良ト
稱シ難カルヘシ何ントナレハ其本條ニ舉サ

ル各項目タルヤ必ス其受訴裁判所ノ権限
屬スヘキ実アルヲ以テナリ

〔第六解上訴ヲ為ス〕（是ニ付テハ本法実施條

例第八條第二項ヲ參看スヘシ）

本法ニ於テハ再審ヲ以テ上訴ニ加ヘス〔本書

凡例參看〕蓋再審ハ上級権限ニ阻告レテ審査

ヲ請フノ義ニ非ラサルニ由ル〔本法第五百四

十七條參看〕是ニ於テ本法第四編ニ特ニ此門

ヲ設ケ其第三篇ニハ上訴トレテ控訴、上告、抗

告ノ三目ノミヲ置クナリ乃チ此第百六十三

條ニ於テ再審ヲ其裁判所ニ屬スモノト定メ

之ニ反シテ又第百六十四條ニ於テ上訴ヲ為

スニ付テ一ノ規則ヲ制定シタル由縁ヲ見ル

ヘシ

此第百六十四條ニ順次ニ列記スル送達受領

人ノ序次ハ即チ送達ノ効アルモノヲ云フナ

リ若シ之ヲ誤ルキハ即チ上訴ニ於テ關席不

參ニ陷ラシムル丁アルヘキナリ故ニ送達上

疑ハシキキハ必ス努トメテ其受領權アル人

ノ順次ヲ逐フテ之ヲ為スヘシ然レハ終ニ正

當ノ受領人ヲ得ルニ至ルヘシ

〔第七解送達受取人〕此第百六十四條ニ於テ

ハ單ニ初審ノ裁判所ニ任定シタル送達受取

人ヲ指スモノナリ然ルニ理由説明〔本法第百

六十條及ヒ第百六十一條ニ對スル第四解参
者ニ依リ之ヲ各級ノ裁判所ニ對スル送達受
取人ト做ス。トハ猶々難キ所ナルヘシ今本法ノ
制定材料集ニ依レハ此第百六十四條ノ該一
段ハ北部獨ニ聯邦草案第七百七十八條第八
百四十二條ヨリ採リタルモノニシテ而カモ
該草案ニハ別ニ第二百三十八條ノ参照條ア
リテ稍完善ヲ為セリ即ケ該條ヲ以テ原告
ヲシテ其法律上制裁スル場合〔今草案第二百
四十條〕ヲ除クノ外ハ任意ニ送達受取人ヲ定
メ外部ニ對シテ其効力アラシムルノ規定ヲ
設ケアルナリ然ルニ本案ニハ此如キ規則ヲ
立ル。トナク且己ニ序漏生國草案ニモ之アラ
サルノミナラス理由説明ニモ委員會議筆記
録ニモ更ニ登記弁解スル所ナキナリ
本法ニ於テハ其第百五十七條以下ハ義務ヲ
負ハレムル性質ノ法制ナルヲ以テ第百六十
條同條及ヒ第百六十一條ニ對スル第三解参
者ヲ除キテ任意ノ送達受取人ヲ定ルヲ許サ
サルナリ乃チ此第百六十四條ニ指ス語ハ上
來ニ説ク主義ニ依リ送達受取ヲ委任スルニ
其權ヲ局限スルハ到底上訴裁判所ニ向テ委
任スルキト虽モ無効ナルモノト解釋セサル
可ラス

〔第八解郵便ニ託ス〕

即チ此第百六十四條ハ

本法第百六十一條第一項ノ懲戒ノ趣義ニ相
参照セシムルノ義ナリ

第百六十五條

〔送達ノ場所ニ関スルノ條〕

送達ハ其受ク可キ者ニ遭遇スル各場所ニ於テ
之ヲ為ス得

送達ヲ受クヘキ者其遭遇セル場所ニ住居又ハ
事務所ヲ置ク時住居外又ハ事務所外ニテ為レ
タル送達ハ之ヲ受取ル得拒マサル場合ニ限
リ其効カアルモノトス

第百六十六條

〔送達ノ補備ニ関スル條〕

送達ヲ受クヘキ者住居ニ在ラサル時ハ其住居
ニ於テ成長レタル同居ノ親屬又ハ傭使セラル
、成長者ニ送達ヲ為ス得
是等ノ者不在ノ時ハ書類ノ受領ヲ拒マサル場
合ニ限リ其同一家屋中ニ住居スル家主又ハ借
家人ニ送達ヲ為ス得

第百六十七條

〔全上〕

此規則ニ從テ送達ヲ為シ能ハサル時ハ其送達
スヘキ場所ヲ管轄スル治安裁判所書記局又ハ
其地ノ郵便局若クハ區戸長若クハ警吏長ニ其

交付スヘキ書類ヲ預ケ置キ且預ケ置ク旨ヲ記シテ本人住居ノ門扉ニ貼付シ又ハ成シ得ル片ハ其近隣ニ住スル者ニ名ニ其旨ヲ口述シ置テ以テ送達ヲ為スルヲ得

第一百六十八條 [今上]

特ニ事務所ヲ設置スル工商營業人ニ為ス送達ハ本人其事務所ニ不在ノ時此所ニ居合セタル補助者ニ之ヲ為スルヲ得
送達ヲ受クヘキ代言人其事務所ニ不在ノ時ハ此所ニ居合セタル補助者若クハ書記ニ送達ヲ為スルヲ得

第一百六十九條 [今上]

官廳町村公會又ハ送達ヲ受クヘキ人民集會ノ法律上代人又ハ首長通常執務時間中其事務所ニ不在ノ時若クハ之ヲ受取ニ付キ妨ケアル時ハ其事務所ニ居合セタル他ノ職負若クハ雇人ニ送達ヲ為スルヲ得
其法律上代人又ハ首長住居ニ不在ノ時ニ付テハ特別ノ事務所ナキ場合ニ限り第一百六十六條第一百六十七條ノ規則ヲ適用ス

第一百七十條 [受取ノ拒否ニ関スルノ條]

法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ム時ハ其文付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第一百七十一条 [送達ノ日時ニ関スルノ條]

日曜日及ヒ普通ノ祭日ニハ裁判官ノ特許ヲ得テ送達ヲ為スルヲ許ス但郵便ニ托シテ為サ、ル場合ニ限ル

此特許ハ受訴裁判所々長ヨリ之ヲ為スモノトス又送達スル場所ヲ管轄スル治安裁判所裁判官又ハ受命若クハ受托ノ裁判官ノ担当スル事件ニ付テハ該當裁判官之ヲ為スルヲ得

特許ヲ為シタル命令書ハ送達ノ時其謄本ヲ以テ之ヲ示ス可シ

本條ノ規則ニ従ハスレテ為シタル送達ハ之ヲ拒マサル時其効カアルモノトス

第一解第六十五條乃至第一百七十一条ニ對スル理由ノ説明 蓋此第六十五條乃至第一百七十一条ヲ以テ定メタル規則ハ大約ニ從來ノ法制ヲ採用シタルモノナリ

允送達ハ相當ノ時日適當ノ場所ニ於テ宛名ノ本人ニ為サ、ルヘカラサルナリ

第二解制定ノ沿革 其大要ハ各草案皆同シ

其小異ニ付テハ下ノ第十解ニ述フヘシ而テ國議院委負會ニ於テハ獨リ此第六十六條

ニ付キ異議アリシ乃チ第百六十六條ノ規則
ヲ以テ送達ノ第百六十八條ニ從ヒ為シ能ハ
サル時ニ限ル豫備規則ト為サントノ動議ア
リシモ遂ニ棄却セラレタリ次ラ二箇ノ動議
アリシ即チ原案ニ於テ元ト此第百六十六條
第一項ノ親屬本人ノ同居人タル資質ヲ要ト
セサリシヨリ之ヲ同居ノ親屬ト修正シ雇人
ハ否ラサルモ可ナルヘシトノ動議ナリ遂ニ
採用セラレテ現今ノ明文ニ改正セラレタリ
又此第百六十七條第百七十條ニ付キ其送達
ス可キ書類トアリシヲ「交付ス可キ書類」ト更
正セラレタリ本法第百六十條及ヒ第百六十
一條ニ對スル第二解參者

第三解送達ノ場所 送達場所ニ關シ理由説

明ノ説述スル所ニ曰抑送達ノ場所ハ敢テ送
達受領人ノ本住所本法第百五十三條乃至第
百五十六條ニ對スル第一解及ヒバデン國訴
訟法第百二十八條及ヒ同國下議院委員ノ
報告參者又ハ其他本人ニ特定ノ裁判管轄ア
ルニ是等ニハ更ニ關係スルナク獨ヒ國內
各所町村等ノ別ナク殊ニ外國人ト虽モ之ニ
遭遇スル場所ハ即チ受領人ノ法律上ノ送達
場所ナリ北部獨ヒ聯邦草案第百四十二條
序漏生國草案第百八十七條參者但受領人ニ

シテ要メ得ヘキハ右ノ法律上送達地中ニテ
 其住居場合ニ依リ旅店ニ寄寓スルヲアルヘ
 シ又ハ其事務所ニ送達セラレントスルニ在
 ルノミ若シ受領人此要求ヲ為サス又ハ住居
 若クハ事務所ヲ其送達地ニ有セサルハ之
 ニ遭遇セル相當ノ場所ニ於テ送達ヲ為シ得
 而テ寺院其他教會ノ是ニ屬シアラサルノ趣
 義ニ付テハ特ニ之ヲ明示スルヲ要セサルハ
 シ字漏生國草案第百五十五條ヘツセシ國草案
 第二百三十條參看又宛名人ニ於テ更ニ住居
 又ハ事務所ヲ有セサル處ニ於テハ本人ニ送
 達ニ得ルノミ此如キニ至テハ所謂ノ補備送
 達トシテ他人ニ依頼スルトハ固トヨリ為ス
 ヘキニ非ラス仮令適本人ノ親屬又ハ他ノ本
 法第百六十六條乃至第百六十九條ニ舉ル者
 ニ裁判所執行吏カ遭逢スル場合ト虽モ尚ホ
 為スヘカラサルナリウユルテムベシク國訴訟
 法草案第百二十七條乃至第百三十七條
 ニ對スル理由説明參看云々
 抑本法ニ於テ其第百六十九條第二項ヲ除キ
 高法第九十一條ノ趣義ニ反對シ住居ヲ以テ
 事務所ニ同等ナラシメタルハ頗ル奇異ニシ
 テ而カモ妥當ト云フヘカラス蓋政府ノ官吏
 タルモノハ其私宅ニ於テハ一個ノ私民ニ過

キス僅ニ止ヲ得サル必須ノ場合ニ限リ敢テ
公務ヲ行ヘ得ルナリ合本會社ノ頭取ノ如キ
モ亦之ニ異ナルコトナシ加之一個ノ高估ト
虽モ然ルヘキナリ

然シ又理由ノ説明〔下ノ第四解參看〕ニハ裁判
所執行吏ノ便宜ノ斟酌ヲ喚起セサルニハ非
ラスト虽モ若シ寧口服發章程ヲ以テ執行吏

〔裁判所編制法第十五條〕及ヒ郵便配達夫ニ公
然其事務所ヲ尋ホ出スヲ例ト為スヘキトヲ
明示スルノ善キニ如カサルヘシ而テ之ニ付

テハ亦己ニ本法第百五十八條ノ理由説明〔第
百五十七條乃至第百五十九條〕ニ對スル第五
解ニ於テ云ヘル「アリ曰軍人ノ長官ニ為ス

送達ハ止ヲ得サル片ニ限リ其住居ニ為ス可
シ云々然レ氏法律ニ於テハ其住居又ハ事務
所ノ何レニテモ執行吏候ニ配達夫ノ選ニ任

カストアルナレ氏此説明ハ法ニ背クモノト
嚴密ニ論スレハ或ハ免カレ難カラシ
〔第四解送達ノ補備〕蓋補備ノ送達ハ第三解

ニ依レハ宛名人送達スヘキ場所ニ住居又ハ
事務所ヲ有スル時又ハ其家室内ニ本文ニ明示
スレ輩ノ居合セタル時ニ限リ為シ得ルノニ此

他理由説明ニ於テ説明シテ曰宛名人其場所
ニ住居又ハ事務所ヲ有スル時ハ適遭遇セラ

ル、ト又ハ自ラ遭遇セシムルト否トニ関セ
ス此処ニ送達スレハ則チ各法制ニ於テ本人
ニ為シタル送達ト同一ノ効力ヲ有セシムル
ナリ乃チ本法ニ於テハ其第百六十六條乃至
第百七十條ヲ以テ之ヲ規定シ且適當ノ場合
ニ於テ裁判所執行吏此補備送達ノ何レニ依
テ為スヤハ其斟酌ニ任カセタリ即チ本法ノ
規則ニ從ヒ其宛名ニ向テ正ニ送達ヲ為シ得
ル所ニシテ其受領シタル者實ニ下ノ第九解
参看之ヲ受取り且果シテ之ヲ本人ニ交付ス
ルト否ハ固トヨリ送達ノ効力上ニ關係ヲ及
ホサス復タ本人自ラ濫ニ拒ムルモ之ニ同シ

〔本文第七十條〕享漏生國草案第百六十三條第
百六十五條ヘツセン國草案第二百三十二條ウ
ルテムベルグ國訴訟法第二百四十三條オ
ルデンホルグ國全上第八十九條(三)北部獨乙聯
邦草案第二百四十七條参看〔必竟裁判所執行
吏ハ此第百六十六條乃至第百七十條ノ規則
ニ從フタル以上ハ断シテ此補備送達ニ對ス
ル異議ヲ提出スヘカラサル所ナリ云々
蓋裁判所執行吏ノ斟酌ニ委ヌト理由説明ニ
云フ所ハ本法第百七十八條第一項ニ准據シ
郵便配達夫ニモ適用スヘシ又其趣義ノ然ル
ヘキ由縁ハ即チ本文第百六十六條乃至第百

六十九條ニ悉ク得ノ字ヲ用アルヲ以テ理會スヘシ上ノ第一解參者

而テ此補備送達ヲ緩和スル規則ハ即チ本法第二百一十一條第二項ナリトス

本文第百六十六條乃至第百七十條ノ規則ハ強迫執行ニ付テモ亦適用スヘキナリ本法第

六百八十三條第二項參者
〔第五解住居ニ為ス補備送達〕理由説明ニ明

言スル所ニ依レハ即チ元ト此第百六十六條ハ只其家主及ヒ借家人ニ付テノ一家屋内

ニ同住スルヲ要シタルナリシニ遂ニ現今ノ明文ニ修正セラレ上ノ第二解參者其親屬モ

同居タルヲ要シ僅ニ雇人ノ之ヲ免カレタリ但其理由ハ詳カナラス蓋此者等皆必ス其

本人ノ住居内ニ居合ハスヲ以テ上ノ第三解ノ趣義ニ依リ此第百六十六條ノ要件ト為

スモノ、如シ即チ此條ニ舉ル者ニハ本人住居ノ外殊ニ其事務所ニ於テハ送達ヲ為ス可

ラサルナリ何ントナレハ第八解第二項ヲ除キ其事務所ニ付テハ第百六十八條第百六十

九條ニ於テ特更ニ他ノ代理スル者ヲ明示シアレハナリ

又此第百六十六條第百六十七條第百六十九條ニ付テハ如何シノ原由ヨリシテ宛名本人

ニ遭遇セサル乎ハ之ヲ問フヲ要セサルナリ
必竟是ヲ以テ送達ヲ忌避スルト能ハサラシ
ムルニ在ルナリ

〔成長シタル〕トハ丁年ニ至ラサル者ノ義ヲ包
含シテ而テ其年齢ニ於テ方ニ送達ノ何物タ
ルヲ理會スルニ必要ナル成長ヲ為シアル輩
ヲ指スナリ〔刑法第五十六條第五十七條參看〕
又第百六十六條第二項第百六十八條第百六
十九條ニ於テハ成長シタルトヲ明示スルヲ
要セズトシテ之ヲ為サ、ルナリ必竟其明記
セル輩ニシテ相當ノ年齒ノ者タルヘキハ固
トヨリ言ヲ俟タサルヲ以テナリ

〔傭使セララル、者〕トハ只現實ニ使役セララル、
モノヲ指シ得ルナリ又雇人トハ「¹バイルン國
訴訟法第百九十六條及「¹バデン國全上第二
百二十八條ニ依レハ本法第百六十八條第二
項係ニ第百六十九條ニ列載スル所ノ輩ヲ總
稱スルモノト注意セサルヘカラス〔下ノ第八

解參者

〔家主〕トハ即チ其家屋ノ所有主又ハ管理人ヲ
云フ〔所謂留守居執事又ハ家番ハ別ナリ〕又借
家人トハ之ヲ家主ト並ヒ舉ルニ依ルモ尚ホ
他人所有家屋ヲ借受シ復タ之ヲ他人ニ貸付
スル者ノ義ナルハ明瞭ナルヘシ例ヘハ一家

屋ノ一部分ヲ借用シテ旅店ヲ營業ト為ス者
〔上ノ第三解參者〕ノ類是レナリ
來賓ニシテ寄寓スル者ハ固トヨリ同居人ニ
屬ス即チ送達ヲ為シ得ヘキノ人ナリ
家主又ハ借家人ニシテ送達ノ受領ヲ拒否ス
ル時ハ之ヲ為スヘカラスト虽モ此他ノ受領
スヘキ者ト定メアル者ニ於テハ然ラサルナ
リ〔本文第百七十條ノ法律上ノ理由ナキナリ〕
而テ家主及ヒ借家人ノ同居人又ハ雇人ハ他
ノ家人ノ為メ送達ヲ遍付スルノ能力アルヘ
カラス又家主又ハ借家人ニ為ス送達ヲ重借
人ニ為スヲ得サレヘシ

〔第六解預ケ置及ヒ貼付スルノ補備送達〕此

第百六十七條ノ冒頭ニ於テ其止ヲ得サレ場
合ノ救助方法ナルトハ歴然ナリ乃チ猶ホ第
百六十六條第二項ニ於テ萬一ノ豫備ヲ示ス
カ如ク一般ナリ〔本法第百七十四條(四)參者〕
理由説明ニ曰本法ニ於テハ字漏生國草案第
百六十條ニ倣テ送達書類ノ原本ヲ家屋又ハ
室房ノ門扉ニ懸ケ置クハ甚タ確實ナラサル
處為ナリトシテ之ヲ採用セズ〔字漏生國裁判
通法第一篇第七章第二十一條オルデンボウル
ク國訴訟法第八十九條(四)ハノール國草案
第百六十二條サククセレ國草案第百七十二條

参着之ニ對シテハ本文第百六十七條ノ規則
ハ正當ナリ蓋手教ノ煩雜ナル所ハ之ヲ送達
ノ緊要ニ比スレハ敢テ論スルニ足ラサルヘ
シハノール國訴訟法第百二十二條ウエルテ
ムベルグ國訴訟法第百三十九條バデン國
同上第百二十九條バイルン國今上第百九
十七條法朗西訴訟法第四條及ヒ第六十八條
ヘツセン國草案第百三十一條北部獨乙聯邦
草案第百二十四條参着但此第百六十七條
ノ規則ハ之ヲ事務所ニ適用セシメサルナリ
〔第百六十九條第二項参着〕云々
蓋右ノ理由説明ノ末段ニ云フ所ハ即チ此第

百六十八條第百六十九條ノ場合ニ於テ該條
ニ列載スル輩ノ事務所中ニ在ラサルキハ之
ヲ預ケ置キ且貼紙シテ送達スルノ權ナシ却
テ宛名本人ノ住居ニ送達セシト試テ以テ遂
ニ第百六十六條第百六十七條ニ從ヒ處分セ
サルヘカラストノ趣義ナリ此第百六十七條
ハ獨リ第百六十六條ニ貫聯シアルノミ
然レモ第百六十七條ノ規則ハ第百六十六條
ノ規則ニ依テ推究スルモ送達吏ハ先ツ宛名
人ノ事務所ニ詣リタルト否トニ關係シアラ
ス而テ第百六十九條ノ場合ニ於テハ其第二
項ヲ以テ宛名本人ノ住居ニ於テ送達ヲ為シ

得サル時且本人別ニ事務所ヲ有スル時ハ第
百六十六條第百六十七條ノ規則ヲ適用スヘ
カラスト逆マニ規定シアルナリ
第百六十七條ニ於テ隣人ニ口述スルニ付テ
ハ成シ得ヘキ片ト明示シアリテ即チ送達吏
ノ斟酌ニ任カスノ律義ナリ

第七解 營業者及ヒ代理人 第百六十八條 宜ク
第五解 第二項 第八解ヲ參看スヘシ 工商業
ヲ営ムトアルナレハ營ニ工業者ノミナラヌ
商人ヲモ包括スルナリ 本法 第百五十九條 參
看 然レモ例ヘハ齒科医ノ如キ大ナル市府ニ
テハ其住居外ニ數多ノ事務所ヲ置クニ往々
アレモ之ヲ含蓄セシメサルナリ

營業人 代理人ニシテ其住居ト事務所ト大ニ
遠隔シ殊ニ他ノ町村區即チ其送達吏ノ管
轄區外ニ在ルニ往々之アルヘシ此場合ニ於
テ其事務所ニテ宛名本人又ハ補助者若クハ
書記ニ遭遇セサル時ハ送達吏ハ須ク第百六
十七條ニ准據シテ処分シ能ハス 上ノ第六解
參看 必ス送付スヘキ書類ヲ其住居地ノ管轄
スル官吏ニ交付セサルヘカラサルナリ 本法
第百七十六條乃至第百八十條ノ第四解參看
而テ第百六十八條ニ明示スル輩ノ外ハ本法
第百五十九條ノ例外ニ屬セサル限リハ送達

ヲ受領スルノ權ナシ〔上ノ第五解第一項參看〕
第八解法律上代人及ヒ首長〔本法第一百五十七
條係ニ其註解參看〕此第一百五十九條ノ以テ
第百六十八條ニ相異ナル所ハ即チ送達吏ハ
必ス通常時間中ニ其事務所ニ到ラサルヘカ
ラスシテ而テ其不在ノ時〔上ノ第五解第二項
參看〕ノ外尚ホ受取ニ妨ラル、其ハ補備送達
ヲ為スノ權アル所ニ在リ又代言人又ハ營業
者ニ付テハ居ルト虽モ尚ホ須吏ク面接シ難
キ場合ニ方テハ則チ送達吏ハ之ヲ俟チ若ク
ハ再ヒ來ラサルヘカラス及テ法律上代人又
ハ首長ノ事務所ニ於テハ此場合ニハ直チニ
他ノ職負又ハ雇人ニ送達ヲ為シ得ルナリ
雇人ニハ〔上ノ第五解第四項參看〕役負及ヒ本
來ノ雇人ヲモ包含セシメテ解釈スヘシ本法
第百五十九條ハ是ニ付テモ適用スヘシ
又此第百六十九條第二項ノ結果〔第六解第四
解參看〕ハ即チ特別ノ事務所ヲ有スル場合ニ
ハ第百六十六條第百六十七條ニ從テ補備送
達ヲ為ス可カラズシテ而テ第百六十九條第
一項ノ規則ハ必ス之ヲ為スヘキナリ然レモ
恒ニ閉鎖シアル事務所ハ元ヨリ之ナキニ同
シキヲ以テ即チ此場合ニ方テハ此第百六十
九條ハ更ニ適用シ能ハサル可キナリ

第九解送達ノ受領ヲ拒否ス〔第七十條〕獨
リ其之ヲ拒ムノ權アル者ニシテ爲レ得ルモ
只事實上〔上ノ第四解參看〕之ヲ拒ムヲ得ス乃
チ之ヲ拒ミ得ヘキハ家主又ハ借家人ニ限ル
〔第六十六條第二項〕其他ノ補備者ニ於テハ
只本來法律上之ヲ受領スル資格ナキ乎〔例ハ
ハ親屬ナレト同居セサルカ如キ〕又ハ宛名本
人ニモ有効ナル所ノ〔第六十五條第二項〕場
所〔上ノ第三解參看〕及ヒ時日〔第七十一條第
四項〕ニ付テノ規則ニ背反スル場合ニ其送達
ノ受取ヲ拒ムヲ得ルナリ

〔第十解送達ノ時日〕〔第七十一條〕理由説明

ハ更ニ第一解ニ述フル所ヲ舉テ敷衍シテ曰
祭日モ尚ホ送達ヲ受取ルヤ否ハ其地方ニ從
テ異同アリ乃チ宜ク字漏生國裁判通法第一
篇第七章第二十三條ハノ一ナル國訴訟法第
百二十七條オルデンボルグ國全上第九十二
條〔二〕ウエルテムベルグ國全上第二百四十一條
バイルン國全上第九十九條ハノ一ナル國
草案第百六十四條ヘツセン國草案第二百三十
四條北部獨乙聯邦草案第二百四十八條ヲ參
看ス可シ而テ此特許ハ固トヨリ非常ノ場合
ニ方テ裁判所ノ意見ニ因リ之ヲ爲スヘク且
其命令ヲ共ニ送達スヘキナリ又〔北部獨乙聯

邦草案第二百四十八條第三項及ヒ享漏生國
草案第百六十三條第三項ニ規定スル所ノ其
請求書ヲモ宛名人ニ示カシムルハ敢テ利益
ナシトセズ但法律上日没前ト限リ日没后ノ
送達ヲ禁止スルノ明示ハ未ダ一般ニ行ハレ
ス〔享漏生國草案第百五十六條ヘツセシ國草案
第二百三十五條バイルン國訴訟法第百九十
九條參看〕然レモ多クノ邦國ニ於テハ其民法
ヲ以テ人權自由ヲ保護スル為メノ規則ヲ設
定シアルナリ若シ此法律ノ明定シアラサレ
邦國ニハ其裁判所執行吏ノ服務章程ニ明示
シテ之ニ付キ規定スルヲ適當トスハシ去々
日没後ノ送達ヲ禁止スルノ規則ヲ爰ニ掲ケ
サルハ奇異ト云フヘシ何ントナレハ本法第
六百八十一條ヲ以テ強迫執行ニ関シテハ即
チ之ヲ規定シアレハナリ
普通ノ祭日ナル語ハ為換條例第九十三條並
ニ商法第三百二十九條第三百三十條ニモ用
ヘアリテ即チ政府ヨリ公認スル祭祀日ヲ云
フ義ナリ例ヘハ政府ノ公認ヲ得サル猶太教
ノ祭日ノ如キヲ含蓄セズ但政府ノ命スル邦
君ノ降誕日ハ之ヲ祭日ト為ス
又此第百七十一條第一項ニ掲クル郵便ニ託
ストハ即チ本法第百六十一條ニ於ケルノ意

義 = 同ク尋常ノ郵送ノ義 = 非ラス
〔本法第百五十二條第一解參看〕然レモ配達スル郵便夫
ハ本法第百七十八條 = 照シ敢テ第百七十一
條ノ規則 = 拘束セラカレナリ
此第百七十一條第四項 = 付テハ上ノ第九解
ヲ參看ス可シ

第百七十二條

〔送達書類 = 關スルノ條〕

數名ノ關係人ヲ代理スル者又ハ數名ノ代人ノ
一人 = 書類ノ正本若クハ謄本ヲ送達ス可キ時
ハ只一通ノ正本若クハ謄本ヲ送達シテ足レル
モノトス

數名ノ關係人ノ送達受取人 = ハ其關係人ノ負
數 = 相當スル正本若クハ謄本ヲ送達ス可シ

第百七十三條

〔全上〕

送達ヲ為ス = 付テハ送達証ヲ作ル可シ
送達証ハ送達ス可キ書類ノ原本又ハ之 = 屬ス
可キ紙面 = 添付ス可シ
裁判所執行吏ノ証明シタル送達証ノ謄本ハ送
達ノ時交付ス可キ書類又ハ之 = 屬ス可キ紙面
= 添付ス可シ

送達証ハ之ヲ送達ヲ發シタル原告 = 返付シ
若シ職權ヲ以テ送達ヲ為シタル時ハ之ヲ裁判

所書記 = 還納ス可

第一百七十四條 [全上]

送達証ハ左ノ條件ヲ具備セサル可ラス

一 送達ノ場所及ヒ時日

二 送達ヲ發スル者ノ氏名職權ヲ以テ送達

ヲ為ス時ハ之ヲ命スル裁判所ノ稱号

三 送達ヲ受ク可キ者ノ氏名

四 送達ヲ受領シタル者ノ氏名第百六十六

條第百六十八條第百六十九條ノ場合ニ

於テハ之ニ記名スル者ニ送達ヲ果行シ

タル理由又第百六十七條ノ手續ヲ為シ

タル時ハ該條ノ規則ニ從フタル手續

五 送達ノ受取ヲ拒ミタル時ハ之ヲ拒ミタ

ルヲ以テ其交付スヘキ書類ヲ送達ノ場

所ニ差置タルノ記事

六 送達ス可キ書類ノ正本若クハ謄本及ヒ

送達証ノ謄本ヲ交付シタル記事

七 送達ヲ執行シタル官吏ノ署名

第一百七十五條 [全上]

郵便ニ託スルヲ以テ第百六十一條送達ヲ為ス

時ハ其送達証ハ前條ノ二三七ノ規則ニ從ヒ且

何レノ時何シタル宛名ヲ以テ何レノ郵便局ニ

送達

郵便局

託シタルトヲ記載セサル可ラス

〔第一解理由ノ説明〕 本文第百七十二條乃至第百七十五條ハ送達書類ニ係ルノ規則ニシテ既ニ解説ヲ俟タヌ明晰ナリ而テ其大要ハ現行ノライオン州規則其他バイルン國訴訟法第二百二條以下ハノール國全上第百二十九條以下オールドンボルグ國全上第九十條バテシ國第二百三十三條以下ハノール國草案第百五十五條以下ヘツセン國草案第二百三十六條以下〔北部獨乙聯邦草案第百五十二條第百六十三條〕字漏生國草案第百六十四條以下ニ同シ

〔第二解制定ノ沿革〕 北部獨乙聯邦草案第二百四十九條ハ此第百七十二條ヲ幾ント直寫シカ如ク相同シト虽モ其第二百五十條以下ニ於テハ己ニ本法第百五十二條第一解ニ述フル如ク過半ハ他ノ主義ニ基ツケリ其他ノ各草案ハ大同小異ナリ獨リ此第百七十五條ハ千八百七十二年ノ原案ニテ初テ追加セラレタルモノナリ

國議院委員會ニ於テ本法原案ハ其編次ニ付キ大ニ修正セラレタリ即チ現今ノ第百五十三條曰第百四十九條甲ヲ未タ本來ノ送達書類ニ付テ規定スル處ニ至ラサル條項間ニ移

同法省

シ〔本法第百五十三條乃至第百五十六條ノ第
二解參者〕從テ第百七十三條〔旧第百六十六條
ハ原案ノ第三項ヲ失ヒ之ヲ第百五十六條ニ
譲ルニ至レリ且此第百七十三條ノ現今ノ第
二項ニ於ケル〕通知スヘキトアリタルヲ送達
スヘキニ改メ又此第三項ニ証明ノ字ヲ用ヘ
タルハ旧原案ヨリ採取シ且其送達スヘキト
アリシヲ交付ス可キニ改メタリ〔本法第百五
十三條乃至第百五十六條ノ第五解參者〕又同
條ノ現今ノ第四項ニ職權ヲ以テ送達ヲ為ス
場合ノ追加ヲ為シ而テ第百七十二條ニ付テ
ハ原ト通示又通示スヘキトアリシヲ送達送
達スヘキニ修正シタリ

第三解代人及ヒ送達受取人ニ為ス送達〔此
第百七十二條ハ本法第百五十五條ノ補充規
則ト云テ可ナリ乃チ第百五十五條ノ場合ニ
付キ送達スヘキ書面ノ負教ヲ定メタルニ過
キサレハナリ送達ヲ為サシメントスル者ハ
此規則ノ外ニ送達吏ニ交付スルヲ要セサル
ナリ
單ニ代理スル者トアリテ法律上代人〔本法第
五十條第四解參者〕ト云フニ異ナリテ法律上
代人並ニ他代理者ヲ概括スルノ義ナリ例ヘ
ハ本法第五十五條ニ載スル者並ニ訴訟代人

及々好意管理者〔本法第七十五條以下第八十
五條及々第二百十條ノ理由説明參着〕ノ類是
ナリ獨リ送達受取人ヲ除キアリ之ニ付テハ
即チ此第百七十二條ノ第二項ニ於テ特ニ明
示シアルニ由テ見ルヘシ
本法第百五十七條第三項ニ依レハ法律上代
人又ハ首長ニハ其負數ニ関セヌ一通ヲ送達
スレハ足レリト定ル所ハ又數名ノ訴訟代人
アル時ニモ之ヲ適用スヘシ〔本法第八十條第
三解參着〕而テ此第百七十二條第一項ニ於テ
モ復タ送達受取人ニ一通ヲ以テ足レリト為
シ尚ホ之ヲ數名ノ訴訟人一人ノ代人ヲ立テ
アル片例ヘハ數名ノ幼年者ニ同一ノ後見人
アリ又ハ數名ノ共同訴訟人一人ノ訴訟代人
ニ委任スル如キ場合ニマテ及ホサシメタリ
蓋北部獨ニ聯邦草按第二百四十九條ニ基ツ
キタル此第百七十三條第二項ノ意義ハ只共
同訴訟人本法第六十條ニ準據シ同一ナル
送達受取人一名ヲ指名シタル時ヲ去フナル
ヘシ然レニ共同訴訟人ハ已ニ本法第五十六
條及々第五十七條ニ對スル第四解ニ述ル如
ク必スシモ一名ニ限ルヘキノ義務アルニハ
非ラサルナリ〔本法第六十二條乃至第百六
十四條ノ第七解參着〕此如キ送達受取人ハ之

ヲ各訴訟人ニ送付スルノ紹介人トシテ送達書類ノ負数ヲ一人一通ツ、ヲ受取スルヲ要スヘキナリ〔バデン國訴訟法第三百六十六條參看〕

〔第四解送達証〕 此第一百七十三條ニ對シ理由説明ニ述テ曰送達証ノ原本ハ送達ヲ為サシメタル者ニ返付ス而テ必ス仮令裁判所書記ノ紹介ニ因テ為シタル場合ト虽モ他人ノ手ヲ迂回スルトナク直接ニ遲滞ナク裁判所執行吏ヨリ返付スヘキナリ〔本法第一百七十三條第四項ノ場合ハ格別ナリ〕
又送達証ヲ裁判所ノ一件記録ニ添付スル

ハ己ニ本法ノ手續ニ同シキ送達手續ヲ実行セル各那ニ於テ經驗セル所ニ依レハ即チ不用ノ冗贅ニシテ徒ニ價直ナキノ書類ヲ記録ニ増加セシムルニ過キサルノミ之ヲ原告ヲシテ自ラ保存セシムルハ其簡便ナルト言フ俟タズ若シ或ル場合ニ於テ送達ノ有無ヲ証明スルヲ要スルノ理由アル片ハ其之ヲ所持スル原告ヨリ裁判所ニ提出スレハ則チ足レナリ〔本法第一百七十四條及ヒ第三百三十三條乃至第三百三十五條ノ第五解參看〕云々
此第一百七十四條ノ制定セラレタル由縁ニ付テハ上ノ第二解ヲ參看スヘシ而テ其第四項

＝ 追補セラレタル所ハ即チ本法第一百五十三
條乃至第一百五十六條ノ第六解＝述フル趣義
＝ 基キ職權上ノ送達ヲ為ス場合＝於テハ其
送達証ハ之ヲ裁判所記録＝添付スルノ規則
是レナリトス此他ノ送達証ハ本法第一百五十
二條第百五十四條＝依リ裁判所書記ノ紹介
＝ 因テ為シタル場合＝於テモ尚ホ一切其之
ヲ發シヤシメタル原告＝直チ＝返付セシ
ム又其送達受領ノ對手人ハ何レノ場合＝於
テモ只送達吏ノ証明シタル謄本ノミヲ受取
スルナリ〔本法第百二十四條第二解及ヒ第百
五十三條乃至第百五十六條ノ第五解參者〕
原本ト謄本トノ關係＝付テハ須ク次ノ註解
ヲ者ルヘシ

〔第五解送達証ノ項目及ヒ其証拠能力〕上ノ第
一解參者 此第百七十四條＝對スル理由説
明＝曰前記ノ各法制＝於ケルカ如ク本法＝
於モ亦送達ヲ為シタル＝付キ受領人ヲシテ
送達証＝署名ヤシムルノ規則〔字漏生國裁判
通法第一篇第七章第三十八條第三十九條ウエ
ルテムベルグ國訴訟法第二百四十二條〕ヲ採
用セサルナリ何ントナレハ即チ裁判所執行
吏ノ處為ハ公然タル法律上ノ行為＝シテ其
署名ハ公然ノ信用ヲ措クヘキモノナリ故＝

受領人ノ補助ヲ要セスト為スヲ以テナリ〔第
百七十三條第二項參者〕

又送達証ハ一ノ公証書ナルト及ヒ公証トシ
テ立証ノカアルト〔本法第三百八十條以下參
者〕及ヒ缺漏アル送達証ノ証拠能力ニ付テハ
裁判官斟酌スヘキト〔本法第二百五十九條第
三百八十四條參者〕ニ關シテ別ニ明言スルヲ
要セサルナリ

缺漏アル送達ニ取シタル原被告ハ適當ノ時
期ニ於テ〔本法第二百六十七條參者〕其缺漏ニ
付キ申立テサルヘカラス〔字漏生國草按第百
七十三條參者〕

送達証ノ原本ト謄本トノ間ニ差異ヲ為シテ
ル場合ニ付テ各法制ニ於テ特ニ規則ヲ設ケ
テ以テ受領人ノ所持スル謄本ニ拠ルヘキモ
ノト定メアルナリ〔バイルン國訴訟法第二百
四條字漏生國草按第百七十一條ハノ一フル
國草按第百六十六條ヘツセン國草按第二百三
十七條奧斯太利國草按第百七十五條參者〕然
レモ其送達スヘキ謄本ハ証明セラルヘキヲ
以テ〔第百七十三條第三項〕其原本ト謄本ノ差
異スル場合ハ實際ニ數々アルモノト云フヘ
カラス到底其場合アル方テハ固トヨリ前段
ノ意ニ從ハサルヘカラスナリ何ントナレ

ハ送達受領人ノ為メニハ其送達セラレタル
謄本ヲ以テ正本ト為スヘケレハナリ
第百七十四條ニ「具備セサル可ラス」ト命令法
ニ明示シタル所ハ即チ本條下ニ列擧スル條
項ハ其證書ニシテ完全ナル証拠能力ヲ有ス
ルニ必要ナレモノト知ルヘシ「本法第三百八
十條第一項第三百八十三條第一項參看」抑証
書ノ証拠能力ト及ヒ効力ノ有無トハ大ナル
差別アルヲ以テ遂ニ本法第三百八十一條ノ
規則ハ總ヘテ缺漏スル送達証ノ各場合ニ適
當スヘキ乎將タ本法第二百五十九條ニ依リ
本法ニ規定スル條件ニ缺漏アルニ付キ之ヲ
採ルト否トハ裁判官ノ斟酌ニ委ネ得ヘキ乎
ノ疑團ヲ生スヘシ上ニ舉ル理由説明ニテハ
後段ノ趣義ニ解スルカ如シ然リト虽モ「具備
セサル可ラス」トアル所ニ依ル片ハ仮令缺漏
スル所アルモ是ヲ以テ其證書ノ全体ヲ無効
ナリト為スニ非ラス乃チ缺漏アレハ必ス無
効ナリト云フニ非ラスシテ遂ニ證書タルニ
堪ヘサラシムル缺漏アル時ニ方テ無効タル
ニ至ルヘシトノ義ナリ其之ヲ無効ナラシム
ルニ堪ルト否ニ付テハ裁判所ノ判定ニ委ヌ
ヘキ所ナリ既ニ帝國高等商事裁判院ニ於テモ
最モ嚴肅ナル程式ヲ主トスル為換條例ニ関シ

其第八十八條ノ支拂拒ミ証書ニ付テノ條中
ニ「^ト云々」可ラストアル所ヲ解釋シテ各々大ナ
ラサル缺漏アルモ其拒ミ証書タルニ無効ナ
ラスト説明シタル例アリ

其文字ノ削去等ニ付テハ本法第三百八十四
條ヲ適用スヘキハ固トヨリ論ナシ又其他ノ

誤失ニ付テハ本法第二百六十七條ヲ適用ス
又此第百七十四條ニ依レハ其送達スヘキ書

類ニ付テハ之ヲ送達証ニ明記セヌ是レ送達
証ハ其書類ニ添付シアルヘキニ由ルナリ是

ニ於テ復タ其受領人ノ資質ヲモ記載スルヲ
要セス例ヘハ「^トフランツ、パウ、ニユル」ト稱

スル人或ル航海船ノ簿記手タルニ因リ訴ヘ
ラレ全ク本人ノ一身ニ係ラサル場合ノ如キ

片ニ方テ其本來ノ身分ヲ記載スルハ妥當ナ
ラサルヘシ

而テ原本ト謄本トニ差異アル場合ニ付テ理
由説明ノ意見ハ極メテ穩當ト云フヘカラヌ

實ニ是等ハ法律ニ明示シテ疑義ナカラシム
可キナリ抑理由説明ナルモノハ法朗西國ノ

法律説明部ノ資質ヲ固有スルモノニシテ固
トヨリ之ニ服従スヘシト虽モ然カモ又天理

ノ止ムヘカラサルモノアリ乃チ此法律ニハ
謄本ニ通ノ間ノ差異ヲ云ハスシテ原本ト謄

本トノ差異ヲ云フキハ其原本ヲ以テ正當ト
為スヘキナリ例ヘハ謄本ニ送達ヲ受クヘキ
者ノ氏名ヲ誤テ記載シアラサルモ其原本ニ
ハ之ヲ明記シアリ且受領人ハ之ヲ争ハスシ
テ其送達書類ヲ受領シタルカ如キ時ハ豈其
送達証ハ無効ナリト云フヲ得ヘケンヤ之ニ
反シ送達時日ノ記載ヲ誤リタル時〔第百六十
六條以下〕ノ如キハ受領人ハ其謄本ヲ証ト為
シ得ヘシ然レモ到底謄本ノ缺漏ニ付テモ復
タ裁判官ノ任意ノ判定ニ任カヌヘキナリ
法朗西法制ノ主義ニ於テ送達證ノ原本ノ缺
漏ハ受領人ノ受取タル謄本ニ缺漏スル所ナ
キキハ受取人ヨリ其缺漏ニ付キ申立ルヲ得
スト為セモ又通則トハ遵奉シ難キナリ
〔第六條郵便ニ託シテ送達ス〕第百七十五條
ノ趣義ハ本法第百六十一條ノ懲戒趣義ニ係
ル規則ヲ指スモノニテ郵便ヲ以テ〔本法第百
七十八條第二項〕送達スルノ意義ヲ包含セサ
ル所ナリ之ヲ要スルニ第五條ニ述ル所ハ復
タ爰ニ適用シテ可ナリ

第百七十六條 郵便送達ニ関スルノ條
送達ハ亦郵便ヲ以テ為スルヲ得

第一百七十七條

〔全上〕

郵便ヲ以テ送達ヲ為ス時裁判所執行吏ハ送達
スヘキ書類ノ正本又ハ證明シタル謄本ヲ封筒
ヲ以テ固緘シ之ニ役印ヲ捺シ送達ヲ受ク可キ
者ノ宛名並ニ其事件ノ番号ヲ明記シ到着地ノ
郵便配達夫ヲシテ之ヲ送達セシメントテ郵便
局ニ依頼シテ發付ス可シ且右ノ方法ヲ以テ送
付シタルトテ送達書類ノ原本若クハ之ニ添フ
ヘキ紙面ニ裁判所執行吏記載シテ之ヲ證明ス
可シ

第一百七十八條

〔全上〕

郵便配達夫ノ為ス送達ハ第一百六十五條乃至第
百七十條ノ規則ニ從フモノトス
郵便配達夫ハ其送達ニ付キ第一百七十四條一、三
乃至五、七ノ規則ヲ守リ且其封緘其宛名其事件
番号ヲ具備セル封緘物及ニ送達証ノ謄本ヲ交
付セルトテ証明ス可キ証書ヲ作ル可シ
其証書ハ郵便配達夫ヨリ郵便局ニ郵便局ヨリ
裁判所執行吏ニ交付ス可シ裁判所執行吏ハ之
ニ付キ第一百七十三條第四項ノ規則ニ從ヒ処理
ス可シ

第一百七十九條

〔全上〕

司法省

裁判所書記ノ紹介ヲ以テ送達ヲ為シ得ル限リ
ハ裁判所書記ハ之ヲ送達セシメンコトヲ直接ニ
郵便局ニ請求スルヲ得此場合ニ於テハ第七
十七條第七十八條ヲ裁判所書記ニ適用ス其
必要ナル証明ハ裁判所書記之ヲ為ス

第百八十條

〔全上及ヒ費用ニ関スル條〕

郵便ヲ以テ為シ得ヘキ送達ヲ裁判所執行吏ヲ
シテ為サシメタル訴訟費用ヲ負担スヘク言渡
サレタル原被告ハ其増加シタル費用ヲ負担セ
サルモノトス

獨逸訴訟法釋義

第十二卷

第一解理由ノ説明

郵便送達制ニ付テハ千八

百七十四年起稿ノ原按ニ於テ初テ採用シタ
ルモノニシテ理由説明ニ於テハ詳細ニ其理
由ヲ論述シアレバ我輩ハ法律ノ明文ニ於テ
既ニ其意ヲ解シ得ヘキヲ以テ上ノ第百五十
二條ノ第一解下ニモ敢テ之レカ精密ナル解
釋ヲ為サルナリ其他ニ付テハ又本書凡例
ノ緒言第一、同第二節第四款及ヒ本法第百五
十二條第一解第三解ヲ參看スヘシ而テ北部
獨乙聯邦草按ニ関シテハ即チ送達事務ヲ舉
テ之ヲ裁判所書記ノ支配ニ屬セシメアルヲ
以テ相比照シ得サル所ヲ尋キナリ〔本法第百五

十二條第一解第二解參看

又國議院委員ハ此第百七十七條ニ於テ各外國語ヲ適當ナル獨乙語ヲ以テ譯出シ且通知スヘキノ語ノ送達ス可キニ改メ送達スヘキ正水又ハノ數字ヲ追加シタリ
第百七十八條ニ於テハ二個ノ外國語ヲ獨乙語ニ改メタルノ外更ニ修正セラル、所ナシ
第百七十九條ニ付テハ其末段ハ追加セラレ且之ヲ刪除シ若クハ改正セントノ動議アリ
シモ遂ニ採用ナラスニテ止ミタリ而テ第百八十條ニ付テハ之ヲ刪除スルノ動議兩回ニ及シモ排棄セラレタリ遂ニ送達吏ノ怠慢ニ

對シ原被告ヲ保護スル為メ本法第百十三條〔委員起稿原按ハ第百五條甲ナリ〕ヲ置ク
ノニ決議シタリ

第二解郵便吏ノ責任 郵便官吏ノ不當ナル送

達ノ配達ニ付テ責ニ任スルト否トニ関シ國議院委員ト代議士ノ意見相反對シタリシモ到底郵便局ニ於テ此送達事務ヲ執行スルハ單ニ配達常務ノ一部ニ過キサルカ故ニ帝國郵便ハ千八百七十一年十月二十八日領布ノ帝國郵便條例〔本問題ニ付キ一モ明示シアラサル〕第六條ノ明文ノ外遵奉セサルヘカラザルノ責之ナキニ定マレリ

第三解得

此第百七十六條ニ為スコトヲ得ト
アルハ、安当ナラサルカ如シ其理由ハ、旧原按
ニ郵便送達ヲ追入シタルニ於ケル趣義ヲ以
テ知ルヘシ（上ノ第一解及ヒ本法第百五十二
條第一解第二解參看）復タ此第百八十條ヲ以
テ理由ナクシテ裁判執行吏ヲシテ送達セシ
ムル中ハ、原被告ヲ懲戒スル所ニ於テモ尚ホ
省ルヘキナリ

此第百七十六條以下ノ郵便送達ト本法第百
六十一條ノ郵便ニ託スル送達トノ差異ニ付
テハ、即チ本法第百五十二條第一解第百六十
一條第五解ヲ參看スヘシ

第四解裁判所執行吏

第百七十七條

理由説明

ニ曰第百七十七條乃至第百八十條ノ規則ハ
送達ヲ郵便ニ由テ為シ以テ其實行ヲ確實ニ
且簡便ナラシメンコトヲ期スルニ在ルナリ
而テ郵便ヲ以テ送達スルニ此第百七十七條
ニ依リ原被告ハ自ら直接ニ郵便ニ請求スル
ヲ得ヌ必ズ之ヲ裁判所執行吏ニ托シテ郵便
ニ出サシムヘキナリ蓋此執行吏ノ紹介ヲ要
スル所ハ、即チ送達書類ノ成規ノ如ク具備セ
シメテ徒勞ノ送達ニ至ラシメサルニ由ルノ
ニ是故ニ正ニ送達ヲ為シタル証拠ニハ公然
ノ信用ヲ負荷スル機関ノ証明ニ依テ送達シ

タル謄本ト其原本ト相符合スルヲ提示ス
ルニ限り其効カヲ有ス例ハ原告此如キ証
明ヲ為セハ即チ副席ノ被告ニ對シ欵席裁判
ノ言渡ヲ請願シ得ヘシ獨リ郵便局又ハ郵便
郵便配達夫ノニハ此如キ權利ハ付與シ得
ス是レ郵便本來ノ精神ニ背ク所ニシテ若レ
之ヲ許スモノトセハ避クヘカラサルノ妨害
ヲ惹キ起ス丁アルヘケレハナリ是ニ於テ裁
判所執行吏ヲシテ原被告ト郵便局トノ間ニ
立タシメ以テ証明者タラシムルハ必要ト為
ス所ナリ
又郵便ヲ以テ送達ヲ為スニハ原被告ハ獨乙

国内ニ奉職スル各裁判所執行吏ニ依頼シ得
ヘキナリ乃チ此第百七十七條ニ依レハ郵便
送達ノ紹介スルハ各獨乙内國ノ裁判所執行
吏ノ職務タルヲ明カナレハナリ〔裁判所編制
法第百六十一條參看〕是ニ由テ郵便送達ハ裁
判所執行吏送達ヨリハ實際ノ便宜ヲ見ル所
トス何ントナレハ裁判所執行吏ヲシテ送達
セシムル時ハ原被告ハ必ス送達スヘキ地區
ヲ管轄スル執行吏ニ頼ラサルヘカラスト至
モ郵便送達ニ至テハ即チ執行吏ノ選任ハ原
被告ニ制限シアラサレハナリ云々
内閣代理員ハ裁判所執行吏ノ郵便局ニ請求

スト云フ字義ノ問ニ答テ曰裁判所執行吏ハ其封書ニ送達証ヲ添ヘテ郵便ニ付ス其送達証ニ領収証引換ニ之ヲ交付ス可シト明記シアルヘキヲ以テ請求ストハ明示シタリト
国議院委員ノ起稿委員ハ常例ニ反シ前段ニ於テ送達受取人ニ交付スル書類ニ常ニ交付スヘキト書レ来リタルニモ拘ハラズ送達ス可キノ語ヲ用ヘタリ而テ第百七十七條ノ末段ニハ送達ス可キノ文字其妥当ヲ得タリ蓋此兩語ヲ相對立セシメテ並用スルハ書類ノ性質ヲ識別スルノ誤解ナリシテ甚々其宜ヲ得ヘキナリ

此第百七十七條ノ末段ニ規定シタル証明書ハ本法第百七十三條第四項ニ依リ送達發付人ニ返付スヘキモノナリト雖モ然カモ本法第百六十一條ノ場合ニ於ケル如ク送達ノ式ヲ証スルモノニ非ラスシテ此第百七十八條第二項ニ於ケル如ク郵便配達夫先ツ之ヲ証明シテ以テ受取人ニ交付シタルノ日時ヲ証明スヘキモノナリ然レ本法第百十三條ヲ

参着スヘシ

第五解郵便配達夫〔第百七十八條〕 此第百七十八條ニ付テ理由説明ニ述アル所ハ只本條ハ裁判所執行吏ノ送達規則ニ相貫聯シテ送達

ノ方法ヲ規定スルナリト云フノ外ナラス又
國議院委員會ニ於テ内閣代理員ハ概シテ郵
便規則ノ原則ニ於テ適用シ得サル所アルヘ
シト説明セリト雖モ却テ千八百七十四年十
二月十八日頒布ノ郵便條例第三十五條第二
ニ於テ裁判上ノ書類ヲ配達スルニ受領証ノ
要スルニ付テハ之ニ関シ特定スル規則ニ從
フ可シト明示シアルニ依レハ即チ自ラ此第
百七十八條ノ規則ニ從フヘキナリ
是ニ由テ之ヲ觀レハ乃チ本法第百六十五條
乃至第百七十条ニ限り郵便配達夫ニ適用ス
ヘキモ旧來ノ解釈法ナル「特定ノ規則ハ他ニ

及ホサスルノ趣義ニ從テ本法第百七十一条
ノ規則ハ適用スヘカラスレテ而シテ郵便配
達夫ハ日曜日係ニ普通祭祀日ト雖モ尋常ノ
郵便物ヲ配達スル如ク此配達ヲモ為シ得ル
ナリ且第百七十一条第一項ニ依ルモ亦敢テ
然ラスト為スヘカラス如何シトナレハ訣項
ハ單ニ裁判所執行吏ノ送達ニ付テ規定スル
所ニシテ即チ此特則ハ郵便配達上ニ及ホサ
ルナリ又此第百七十七條ノ規則ハ固トヨ
リ本法第百七十二條ト相連繫シアラサルノ
ミナラス渡々之ヲ要セサルヘシ何ニトナレ
ハ封緘シタル信書〔第百七十七條〕ハ必ス一名

ノ人ニ宛テアリテ配達夫ハ其封緘ノ儘配送スルヲ以ナリ

此第百七十八條ニ於テ郵便配達夫カ配達ニ付キ要スル受取人ノ受領証ニ記載スヘキ條件ハ猶ホ本法第百七十四條ニ於ケル如ク云ヒス可シト命シアルニ因テ**本法**第百七十二條乃至第百七十五條ニ對スル第五解ニ説述スル所ハ度々此郵便配達夫ニ付テモ亦適用スヘキナリ

而テ此第百七十八條ニ於テ郵便配達夫ハ其送達証ノ原本ヲ上^長官ニ返納スル規定ヲ設テ以テ本法第百七十三條ヲ幾分カ補充シタル

ナリ又此第百七十八條第二項ヲ以テ配達夫ハ送達証ノ謄本ヲ受取人ニ交付シタルヲ証明セサル可ラスト規定シテ其之ヲ為スヲ配達夫ノ責務ナリト間接ニ命令シタルナリ

〔第五解裁判所書記〕〔第百七十九條〕 抑此第百七

十九條ニ付テハ国議院委員會ニ於テ頻ニ議論アリタリシ〔上ノ第一解參看〕某議員等ハ本條ニ依レハ裁判所書記ヲ以テ送達夫ニ定ルノ嫌アルカ故ニ本條ヲ刪除セント論シ他ノ數員ハ行文中ノ得字ヲ削テ命令條ニ改シト主張セリ乃ケ元來裁判所書記ナル者ハ裁判廳内ニ服務スルモノニシテ封帛ヲ自ラ郵便

局ニ携帶スヘカラスルナリトノ動議ニ對シ
内閣代理員答テ曰何レノ裁判所ニ於テモ内
部ノ使没即チ旧時ノ裁判所使部ノ課程ノ為
メ特ニ裁判所執行吏ヲ常置シ以テ昏記ノ使
用ニ供シ得ヘシ然レハ執行吏ヲシテ親ク之
ヲ携帶シテ郵便ニ出サシムルハ敢テ妨ナカ
ルヘシ若シ執行吏亦自ラ之ヲ為シ得サル場
合ノ為メ他人ヲ要スルモノト為スモ執行吏
ニ齊キ信任スヘキ者ヲシテ之ヲ為サシメ得
ヘキナリト

遂ニ公然ノ解叙〔本法第五條第二解參看〕ヲ定
メ乃チ裁判所昏記ノ証明〔本文第七十七條

ニハ必スシテ自ラ郵便局ニ至リタル旨ヲ記
載スルヲ要セス之ヲ郵便ニ出スヘキジヲ裁
判所執行吏ニ屬託シタル旨ヲ記載シ得ルヲ
ト為セリ

是カ為メ本法第五十四條ノ命令規則ハ其
効力ヲ失ヒタリ而テ昏記ハ其管轄ニ歸スル
場合ニ付キ〔本法第五十二條第二項及ヒ第
百五十四條參看〕左ノ四種ノ方法ヲ選テ為シ
得ルニ至レリ即チ〔第一〕裁判所書記ハ本法第
百五十四條ニ依リ其管轄ノ裁判所執行吏ニ
送達ヲ囑託シ〔第二〕又ハ本文第七十七條ニ
依リ郵便ニ出テ送達シ〔第三〕又ハ書記自ラ之

郵便局ニ携行シ〔第四〕若クハ内務ノ為メ常
置ノ裁判所執行吏ヲシテ之ヲ携行セシメ得
ルナリ

右ノ第四ノ手續ハ本文第百七十九條ノ直接
ニ云々ノ趣義ト相符合セサルノミナラス概
シテ上末ノ解釈ニ因テ裁判官ノ為メ拘束ス
ル能力アル法律ト為レ難キナリ〔本法第五條
第二解參着〕然レ氏畢竟是レ送達方法ニ付キ
本文第百七十七條ノ甚々重要ナラサル証明
ニ関スルニ過キサル一此工事ニシテ而カモ
送達發付人ニ於テハ裁判所書記自ラ又ハ其
囑託シタル〔其責任ヲ負フ〕者郵便局ニ携行ス

ルノ如何ニハ敢テ關係セスレテ可ナルナ
リ

之ヲ要スルニ裁判所書記ハ裁判ヲ受ケアラ
ズ其選フニ任カスナリ乃チ此第百七十九條
ノ得トハ單ニ書記自ラ郵便局ニ詣ルモ又ハ
裁判所執行吏ニ屬託スルトモ〔第百七十七條
任意タルノ義ヲ示ス所ナリ而テ送達發付人
若シ不当ニモ郵便送達ヲ為サハルハ則チ
送達發付人ハ本文第百八十条ニ依テ增加費
ヲ荷ハサルヘカラス若シ又之ヲ為サシメサ
ルハ書記ノ重キ過失ニ因ルハ本法第九十
七條ニ依リ書記其增加費ヲ負担セサルヘカ

ラサルナリ

第六解增加費用〔第一百八十條〕

理由説明ニ曰原

被告ハ送達ヲ裁判所執行吏ヲシテ為サシム
 ルモ又ハ郵便ニ出シテ為サシムルモ固トヨ
 リ選択スル所ニ依リ得ヘシ然レモ費用ノ低
 廉ヲ以テ為シ得ル郵便ニ頼ラスレテ故ラニ
 裁判所執行吏ヲ用テ送達セシメタル時ハ之
 ニ因テ増加スル費用ヲ此百八十條ニ依リ負
 担セサル可ラス蓋此規則タルヤ郵便送達ノ
 實際ニ便益ナル効用ヲ奏揚セシムルニ堪フル
 所ヲ知ラシメ得ヘシ云々〔然シ上表ノ註解ヲ
 参看スヘシ〕

2375